

『冷血』研究 (3)

—「偶然」が描き出すPerry像について—

大 園 弘

はじめに

「私が作品を書くことに決めたのは、実はペリーの存在があったからだ。彼の持つ何かすべてを変えた。というのも、ペリーは私のイマジネーションの世界にも存在する人物だったからだ。」¹カポーティ (Truman Capote) は、『冷血』 (*In Cold Blood*, 1965) の執筆に関して、かつてナンス (William L. Nance) にこう語ったことがある。ペリー・スミス (Perry Smith) とディック・ヒコック (Dick Hickock) の逮捕が、カポーティがクラター (Clutter) 事件の取材のために現地入りして1ヶ月余りが経過した時点だったという事実を思い起こせば、ペリーがカポーティの「イマジネーションの世界にも存在する人物だった」という偶然の一致が、大作『冷血』を生み出したといっても過言ではない。

ところで、このエピソードが示唆しているように、偶然の持つインパクトは、時として、実に甚大である。哲学者九鬼周造が述べているとおり、「偶然な事柄であってそれが人間の生存にとって非常に大きい意味をもっている場合に運命という」²のであろう。そしてそれほど大きな影響力を持ちうる偶然は、文学作品にあっては、とりわけノンフィクション・ノヴェルをよりドラマチックに展開させるためのファクターとして重要な役割を担うであろう³。個々の出来事が作家による創造の産物ではなく、事実に基づくものだからである。実際、『冷血』においては、ペリーらによるクラター事件の遥か以前にはじまり、犯

行を経て、彼らの処刑に至るまでの一連の経緯が、意外にも多くの偶然の所産として描かれている⁴し、それにより作品全体に亘って劇的効果が高まっているのはたしかである。

だが、カポーティが『冷血』の執筆に際して偶然の出来事に特別の関心を寄せたのは、作品の劇的効果を高めるといった技巧面への興味からだったとは考えにくい。むしろ、そうした可能性も完全には否定できないとしても、カポーティにとってそれら偶然の出来事は、むしろ、ペリー・スミスを自らの「イメージネーションの世界にも存在する人物」として描きあげるうえで必要不可欠な要因だったように思われる。

よって本稿の目的は、『冷血』に描きこまれた偶然の点と点との関係の在りようを時系列的に跡づけていきながら、それらの出来事を通して浮かびあがるペリー像、すなわち、カポーティのイメージネーションの世界にも存在する人物像を明らかにすることにある。

I. ディックとの出逢いに至る偶然の連鎖

『冷血』における偶然の最初の点は、ペリーとディックのカンザス州立刑務所での出逢いに求められがちである。「こんどのは、ディックがいなかったならば、何一つ起こるはずはなかっただろうし、ある意味では、大部分がやつ⁵の責任だった」というペリーの発言が、たしかに彼らの出逢いの重大さを伝えてはいる。だが、作品にはディックとの出逢いそれ自体が、幾つかの偶然の連鎖の結果であることが「記録」されてもいる。偶然の最初の点は、正確には二人が出逢う4年ほど前の、1955年の7月に遡る。

その年の夏のある日曜日、ペリーは朝鮮戦争当時の戦友をマサチューセッツ州ウスター（Worcester）に訪ねる旅の途中で、行きずりに出逢った同じ苗字のスミスという名の男の車で、カンザス州のフィリップスバーグ（Phillipsburg）に到着した。「そこで“運命”が“悪い仲間”という形をとって姿を現わした。」（136）作者はそう注釈を付している。その日、男の提案でペリーら

はひと気のないビルに忍び込み、多数の事務用品を盗んだ。その数日後、盗品を積んだままの二人の車一運転していたのは男のほうだった—が信号無視をした現場をたまたま警官に目撃されてしまう。「その数日後、このこそどろたちがミズーリ州のセント・ジョーゼフ (Saint Joseph) という町で信号無視さえしなければ、ただそれだけのことに終わっていたかもしれない。」(137) 逮捕された二人はフィリップスバーグへ送還されるも、48時間後には脱走に成功する。同年11月には、ペリーはグレーハウンド・バスでウスターに着き、戦友の住所を探し当てた。だが、戦友は半年前に引っ越しており、行き先は不明だと判明する。失望したペリーはバス停に戻り、ぶどう酒で凍えたからだを温めていたところを浮浪罪で逮捕され、14日間拘置される。このときは偽名が通用したので、フィリップスバーグでの刑務所破りはばれずにすむ。釈放後、ニューヨークで3ヶ月余りを過ごし、翌56年3月、ペリーは滞在先のホテルでF.B.I.の捜査官に発見され、カンザスへ送還される。「私はカンザスへ引き戻された。フィリップスバーグへ。あの素敵な刑務所へだ。」(138) ペリーは10年の求刑に対し、5年の判決を受ける。こうして同年3月14日、カンザス州ランシング (Lansing) にある別の州立刑務所でのペリーの服役がはじまった。

以上が、ディックとの接点になるカンザス州立刑務所にペリーが収監されるまでの経緯である。同じ苗字のスマスという男との出逢いにはじまり、偶発的な幾つかの出来事とそのあとに続いている。すなわち、フィリップスバーグへ着いた日が日曜日だったこともあって、ひと気のない建物での窃盗を促す要因になりえたこと、盗品を積んだままの車が信号無視で警官の目にとまったこと、ウスターに住んでいるはずの戦友が引っ越していたことなどである。これらのうち、どれか一つでも起こらなかったり、違った起こり方をしていれば、ペリーがランシングに送られることも、その結果として、ディックとそこで出逢うこともなかったであろうが、注目すべきは、上掲の一連の出来事がペリーの悪意に端を発しているわけではないという点である。それらはペリーの意思や意図とは無関係に生起している。「そこで[フィリップスバーグで] “運命” が

“悪い仲間”という形をとって姿を現わした」という作家によるコメントに、そうした意味合いのみならず、不可抗力的な力に弄ばれる「犠牲者」としてのペリー像が描き出されてもいる。

II. ディックとの出逢いと再会

ペリーが州立刑務所に収監されて約2年後の1958年4月頃、ディックが詐欺と不正小切手使用の罪でランシングに送られてくる⁶。ペリーはその後1959年7月6日にディックより先に仮釈放を迎えるので、二人は約15ヶ月間を同じ刑務所内で過ごした計算になる。しかし、「ペリーはランシングでの最後の数ヶ月まで、ディックのことをろくに知りもしなかった」(44) とあるように、二人が出逢うまでにはしばらくの時間を要した。

白人だけでも千数百名にものぼる受刑者集団⁷のなかで、ペリーとディックが接点を持ちえたこと自体は単なる偶然によるものであった。だが、二人が他者に求める性質をそれぞれに持ち合わせていたという点では、この偶然の出来事の持つ意味は大きかった。「ディックの現実的なところ、つまり、すべての事柄に实际的にアプローチしようという姿勢こそ、ペリーが彼に魅かれた主たる理由だった。自分と比べて、ディックが正真正銘たくましく、不死身で、“まったく男性的に”見えたのだ。」(16) ペリーがディックをこう評価する一方で、「ディックはペリーがめったにお目にかかれない人物、“生まれつきの殺し屋”——完全に正気でいながら、良心を持たず、動機の有無とは無関係に、冷酷無比な致命的打撃を与える人物——だと確信した。こうした才能を支配下におけば、有利に開発できるというのがディックの見解だった。」(55) ディックはこうしてペリーを「利己的目的のために有利な」人物だとみなしていた。こうしてペリーとディックは偶然にも不穏な空気を宿した出逢いを果たしたのだった。だが、この出逢いがのちの再会へと引き継がれてゆく過程には、刑務所内でもうひと組の出逢いが起こっていた。ディックと、クラター家の情報を彼に提供したフロイド・ウェルズ (Floyd Wells) との出逢いである。

ウェルズは窃盗罪で、1958年6月、カンザス州立刑務所に収監され、同年8月に仮釈放を迎えるはずのディックと、偶然にもひと月ほど同室となった。彼は1948年の秋から約1年間クラター農場で働いたときのことをディックに話したことがあった。ディックはその情報をもとにして、金目当てのクラター家襲撃の計画を練った。「私が窃盗を犯さなかったら、ディックに遭うこともなかったし、クラターさんが墓場に入ることもなかったでしょうに。」(161) ウェルズはのちにそう述べている。この二人のあいだで、クラター家のことが話題にのぼっていなかったならば、むろん、ディックが仮釈放後にペリーに手紙を書くこともなかったであろう。

ところで、ディックがペリーに手紙を書いたのは、「生まれつきの殺し屋」ペリーを相棒にして、クラター家襲撃計画を実行するためであったが、二人が再会を果たすまでには、さらに二つの偶然が重なっている。逮捕後、ラスヴェガス (Las Vegas) からガーデンシティ (Garden City) に移送される車中で、ペリーは主任捜査官デューイ (Alvin Dewey) に次のように告白している。

「まあ、こんどの事のはじまりは、おれがアイダホ州ブール (Buhl) で受け取った1通の手紙だった。9月か10月のことだ。手紙はディックからのもので、確実にうまくいく計画がある、と書いてあった。完璧な計画だとね。返事を出さずにいると、また手紙が来て、カンザスに戻ってきてパートナーになってほしいと勧める内容だった。どんな種類の計画かは書いていなかった。ただ、それが“必ずうまくゆく計画”とだけあった。ところで、その頃、たまたま私はカンザスに行きたい別の理由があった。他人には話したくない個人的な理由でだ—今度の事とは無関係な事だ。そんなことでもなかったら、私はあそこへは舞い戻らなかつただろう。だが戻ってしまった。そして、ディックがカンザスシティのバス停で私と会ったってわけだ。」(傍点筆者 233)

ちなみに、ペリーはディックよりも38日早く仮釈放となり、その後4ヶ月のう

ちに、彼はネヴァダ州リノ（Reno）を皮切りに、ラスヴェガス、ワシントン州ベリンガム（Bellingham）、アイダホ州ブールへと転々とし、ブールでトラック運転手としての一時的な仕事を見つけたときに、ディックから手紙を受け取ったのだった。そして、上掲の引用文に明らかなとおり、ペリーにはディックに会うつもりなど微塵もなかったにもかかわらず、カンザスに戻ってほしいというディックの思いとカンザスに戻りたいというペリーの思いが、偶然にも交差した。そして、ディックとペリーの再会に繋がる最後の偶然がさらにペリーを見舞った。

ペリーはランシングで刑に服していた3年数ヶ月のあいだに、「自分の“本当の唯一の友”（his “real and the only friend”）」（42）であり、「自分を“本当に理解してくれた”唯一の友（the one friend who had ever “truly understood” him）」（43）でもある友人を得る。ウィリー＝ジェイ（Willie-Jay）である。カンザス州立刑務所の模範囚で、刑務所付けの教戒師の書記を務めていたウィリー＝ジェイは、唯一ペリーの価値と可能性を認識してくれた人物であり、ペリーの側も「ウィリー＝ジェイのうちに自らの自負心の支柱を、自らの感受性の隠れ家を見出した」（45）のであった。そのウィリー＝ジェイが1959年11月12日の木曜日に釈放されることを知ったペリーは、ディックからカンザスに来るようにと言ってきた日付が、ほとんど、ウィリー＝ジェイの釈放の時と一致していることに気づいて、カンザスには戻ってはいけないという仮釈放の条件を顧みることなく、彼との再会—ディックとの再会ではない—を望んだのだった。

ペリーはウィリー＝ジェイが釈放になる夜、カンザスシティーのバスターミナルに到着した。だが、ペリーが来ることなど知らなかったウィリー＝ジェイは、ペリーが到着した同じターミナルを5時間前に発っていた。この不運な偶然が、結果的にペリーをディックに近づけた。「それにしても、もし自分がウィリー＝ジェイと出会い損ないさえしなかったならば、いまごろ、ディックが一足の黒いストッキングを持って現われるのを、病院の外でうろうろと待ち受け

ていたりはしなかっただろうとペリーははっきりと確信できた―いや、直観でそう“わかった”。(46) ペリーはのちに、クラター家へ向かう途中の町で、こう思いを巡らすのであった。

ペリーがディックと出逢い、再会するまでの期間にも、以上のように偶発的な出来事が幾つも連なっている。だが、それらの出来事から浮かび上がってくるのは、単に不可抗力的な力に翻弄される「犠牲者」としてのペリー像にとどまらない。とりわけ、ともに偶然の所産であるディックとの出逢いとウィリー＝ジェイとのすれ違いに関するこれら二つの挿話には、「遅しさ」、「男らしさ」、「自負心の支柱」、「感受性の隠れ家」など、いずれも力強さや安定感といった「確かさ」への指向が描き出されており、このことが却ってペリーの精神面の不安定感を際立たせると同時に、「確かさ」を探し求めてさすらう「放浪者」としてのペリー像を浮かびあがらせてもいる。

Ⅲ．犯行当日の偶然

犯行は1959年11月15日未明のことだった。ペリーはのちに、ラスヴェガスからガーデンシティーに移送される車中で、犯行前にガソリンスタンドに立ち寄ったのが「夜中の12時ごろだった」(235)と語り、捜査官ダントツ(Clarence Duntz)にクラター家での滞在時間を尋ねられたときには、「多分、1時間ぐらいだった」(243)と答えている。ガソリンスタンドがクラター邸のあるホルカム(Holcomb)の手前7マイルに位置すること、クラター邸に近づくにつれ車の速度が落ちたこと、殺害が逃亡直前だったことを考慮に入れば、殺害時刻は午前2時前後だったと推測できる。

この犯行当日にも、二つの偶然が犯行と捜索に影響を及ぼした。その一つはクラター家の飼犬テディー(Teddy)に関するものである。作者はこの番犬の性質について、次のように述べている。

「しかしテディーにはおかしいところがあった。警戒心が強く、いつでも吠

え立てるよい番犬だったが、その勇敢さには一つの欠点があった。銃をちらりとでも見せると、テディーはさっそく頭を垂れ、尻尾を巻いてしまうのだった。」(13)

ペリーらがクラター邸に到着したのは、雲一つない満月の夜だった。ペリーが銃を、ディックがナイフと懐中電灯を持ち、二人は屋敷に忍び寄っていった。そのときテディーが彼らの姿に気づいたか否かは神のみぞ知ることだが、かりに気づいていたならば、この番犬は月あかりに浮かびあがった猟銃に怖じ気づいたにちがいない。「テディーがなぜ吠えなかったのか、われわれには理解できないんだ。銃を見て逃げ出したというのでなければ」(236)とデュースも語っているとおりである。もしその晩が月夜でなかったならば、あるいは月夜であってもペリーが銃を隠していたならば、テディーは持ち前の性質を発揮して二人に吠えかかり、そのために彼らが少なくともその夜の犯行を思いとどまることもありえたであろう。

二つめの偶然は犯行当夜の風向きに関するものである。クラター家の敷地内には使用人であるアルフレッド・ステックライン (Alfred Stoecklein) 夫妻が住んでいた。「夫妻はクラター邸から100ヤードと離れていない場所に住んでいた」(78)ので、4発の銃声がじゅうぶんに届く範囲内にいたわけだし、しかもその夜は「奥さんが赤ん坊の看病をしていた。夫妻の話だと、彼らは一晚じゅう寝たり起きたりだった」(235)ので、夫妻は普段の晩よりも周囲の気配に一層敏感になっていたと考えられる。だが、その夜は西風が吹いていた。夫妻宅は風上に位置しており、そのうえ夫妻宅と屋敷とのあいだにはミロの大きな納屋があり、その納屋が音を吸収したせいで、たまたま夫妻の耳には銃声が達することはなかった。もしも、その夜、西風でなかったならば、事件の展開も随分と様変わりしていたことであろう。

こうして犯行は言わばペリーらに有利な条件の下に行なわれたのであるが、皮肉にも、上記の偶然が犯行を促す要因となったという意味では、偶然の持つ

負の力がペリーらに降り注いだとも言えるであろう。そしてその点に、運にも見放され転落の一途を辿るべく運命づけられた「救われざる者」としてのペリー像を読み取ることができる。

IV. 逮捕までの偶然の連鎖

ペリーとディックの逃亡は、1959年12月30日にネヴァダ州ラスヴェガスで二人が逮捕されるまで、約ひと月半に及んだ。彼らの逃亡先は、ざっと順に、オクラホマ州、テキサス州、メキシコ、カリフォルニア州、ネbrasカ州、アイオワ州、カンザス州、フロリダ州、テキサス州、ネヴァダ州と辿ることができる。この逃亡はすべて陸路によるものだったために、これらの合衆国諸州とメキシコ以外にも、二人が逃亡中に立ち寄った州や地域はもちろん多い。

ペリーらには、この逃亡中にも、数々の偶然が降りかかった。そのうち、彼らの逮捕に結びつく出来事だけに限ってみても、その数は豊富で内容も多様であり、それらによって作品の劇的効果のみならず、前節までに指摘したペリー像が、とりわけ運からも見放され転落の一途を辿るべく運命づけられた「救われざる者」としてのペリー像が、一段と鮮やかに描き出されているように思われる。

さて、ペリーらの逮捕後の取り調べのなかで、捜査官ナイ (Harold Nye) はディックに「殺人者たちは二つだけ誤りを犯した」(229) と伝えた。その一つは、ディックらが証人を残したことだった。カンザス州立刑務所でディックと同室だったフロイド・ウェルズである。途中までは難航していた捜査も、ウェルズの情報提供のおかげで解決に向けてたしかに大きく前進した。しかしながら、彼の情報提供は、もとはと言えば、ある偶然の出来事に促された結果であった。

ウェルズは事件発生から2日後の11月17日に夜のラジオで初めて事件を知った。彼は驚きと動揺を禁じえなかった。なぜならば、「彼は殺された家族のみならず、その家族を殺した犯人もとてもよく知っていた」(160) からである。

彼は刑務所所長への密告も考えたが、万一、それが他の囚人たちに知られると、仕打ちを受けることになるかと怖れを抱き、一旦は密告を思いとどまった。それから1週間後に、偶然が彼に降りかかった。カンザス州の地方紙ハッチンソン「ニュース」が、犯人の逮捕と有罪の判決に結びつく情報に1,000ドルの懸賞金を出すという記事を報じ、「それを読んで、ウェルズは話してしまいたいという気持ちをかきたてられた。」(162) この気持ちと、打ち明けてしまえば自らも共犯者として訴えられるのではという不安とのほざまで苦しみながら、さらに10日が経過したとき、ウェルズは事情を打ち明けたある囚人の取り計らいで、刑務所の副所長に話す機会を得たのだった。こうして容疑者が絞り込まれたわけだが、それを可能にしたのは、人に話してしまいたいというウェルズの気持ちと、ハッチンソン「ニュース」の懸賞金との、いわば「偶然の出逢い」であった。

容疑者の居所をつきとめ、その身柄を確保すること。捜査はこの新たな局面を迎えたが、それはそれで難題であることに変わりにはなかった。しかしこの難題も、容疑者たちの迂闊な判断と行動によって、やがて解かれることになる。そして、その過程でも幾つかの偶然が連なりあっている。

メキシコで所持金が底をついたディックとベリーは、アメリカに舞い戻るという選択肢を選んだ。バスでカリフォルニア州バーストウ（Barstow）に到着したのち、二人はヒッチハイクを重ねてアイオワ州まで辿り着いた。乗せてもらえる車もなく数時間歩きっぱなしの二人を突然の豪雨が襲い、彼らは最寄りのある納屋に避難した。暗い納屋の中で煙草を吸おうとマッチを擦ったディックの目に、その炎の明かりで鍵がささったままのシヴォレーが見えた。無一文の二人は、この車でカンザスシティに戻り、偽小切手を使って現金を工面することに決めた。カンザスシティに到着すると、ディックは以前勤めていた中古車会社に忍び込み、廃車のナンバープレートを盗んでそれをシヴォレーに取りつけた。その後、二人は偽小切手でテレビを購入するのだが、店員の機転が事件の解決の決めてとなる。「彼らが車で帰ってゆくとき、店員が念のため

車のナンバーを控えていた」(198) ののである。

ディックが実名で小切手に署名していたこともあり、この店員の機転のおかげでデューイら捜査官は容疑者たちがカンザスシティにいることを知るに至る。運悪く、このとき捜査官たちはディックらの身柄の確保に失敗してしまうが、警察当局に自分たちの車のナンバーを知られていることを容疑者たちが知らなかったことは一彼らにもしそれがわかっていたならば、ナンバープレートは取り替えられていただろうし、別の車に乗り換えていた可能性も高い一、捜査官側にとっては幸運だった。車のナンバーが手がかりとなり、のちに二人がラスヴェガスで発見されることにつながるからである。アイオワ州での突然の豪雨、納屋への避難、鍵がささったままの車の存在、電器店の店員の機転。まさに、これらの偶然の重なり合いを経て、容疑者逮捕の条件が満たされていったと言えよう。

捜査官らはついにラスヴェガスでディックらが乗ったシヴォレーを発見し、容疑者の身柄確保に辿り着いた。だが、ガーデンシティでその報を受け取ったデューイには、なおも心配なことがあった。逮捕がすなわち事件の解決を意味するわけではなかったのであり、彼が妻のマリーに語ったように、「たとえ犯人だとしても、彼らは自白をしないだろうし、もし自白がなければ、決して有罪とはできないだろうー証拠はあまりにも状況的だ」(213) ったからである。

デューイの言う状況的な証拠とは、クラター氏の遺体が横たわっていたマットレスの空き箱についていた二つの靴跡のことである。一つは血に汚れた猫足印の靴跡（ペリーのもの）で、もう一つは、肉眼ではわからなかったが写真に撮ってはじめて浮かびあがったダイヤモンド模様の靴跡（ディックのもの）だった。これらの靴跡が、「捜査官たちにとっての揺るぎない唯一の“重要な手がかり”」(83) だったからである。デューイは「彼らがそれらの靴をとくに処分してしまったことには、まず疑う余地はない」(190) と覚悟を決めていた。

デューイのこの心配はたちまち晴れた。逮捕時の二人の所持品の中から、靴跡にぴったりとあう靴が二足とも見つかったのである。ディックとペリーがメ

キシコからアメリカに戻ると決めたとき、ペリーはこの二足を含む所持品を荷造りし、その荷物をネヴァダ州ラスヴェガス局留便で送っていたのだが、ペリーがこの郵便局で荷物を引き取った直後に、彼らの身柄が拘束されたのだった。捜査官ナイが後日新聞記者に語ったように、「逮捕が5分早かったならば、どうなっていたかわからなかった！」(216)のである。

処分されていて当然だった靴が二足とも捨てられずにいたという事実、自分の靴だけならまだしも、ペリーがディックの靴まで保管していたという意外な事実—理由には触れられていない—、シヴォレーがペリーの荷物の送付先であるラスヴェガスの郵便局近くで発見されたという事実、逮捕のタイミングが、ペリーが郵便局で荷物を受け取った直後だったという事実。これらの事実が、すべて奇跡とでも呼びたいくなる偶然の出来事であり、それらの出来事の絶妙な組み合わせが、事件を解決に大きく引き寄せたのであった。

ナイの言う、殺人者たちが犯したもう一つの誤りとは、まさに、彼らが物的証拠(靴)を残してしまったことである。残るは二人の自白のみである。しらを切りとおそうとしたディックはこの物的証拠を突きつけられて、事件への関与を認めた。「ペリーの仕業です。私には止められませんでした。やつが全員を殺しました。」(230)一方、ペリーはディックよりも持ちこたえた。ディックの場合とは異なり、ペリーの自白のきっかけは、もっと精神的なものだった。逮捕地のラスヴェガスから移送先のガーデンシティーに向かう車中で、デュレイはディックからペリーが自転車のチェーンで黒人を殴り殺したことがあると聞いたと、ペリーに語る。それを聞いた瞬間、ペリーは自白を決めた。

「もしおれたちが捕まるようなことがあれば、そしてもしディックが忍耐を放棄しちまって洗いざらいはいてしまうようなことがあれば、一やつはきっとその黒人のことをしゃべっちまうだろうと、おれには前からわかっていた。」(232)

ペリーはこのように語ったのちに、事件の背景を詳述しはじめたのだが、彼に自白を促したのはディックに対する憤怒であった。こうして事件は解決をみた。

結び

「選択が大切だ。それがなければどこにも辿りつけない。」⁸カポーティはかつてノンフィクション・ノヴェルの執筆の一条件として、このように取捨選択の重要性を強調したことがある。むろん、集めた情報の中から闇雲に取捨選択がなされることはありえない。辿り着くべき先をあらかじめ設定し、その「目的地」をつねに意識しつつ、ノンフィクション作家は多くの情報の中から適切な事項を取捨選択しなければならない。

ペリーを自らの「イマジネーションの世界にも存在する人物だった」と実感したカポーティにとって、ペリーをイメージどおりの人物として描き出すこともまた、『冷血』を書き上げるうえで辿り着かねばならない「目的地」の一つであったに違いない。この目的を叶えるために、カポーティは取材ノート8,000ページ分にも及ぶ情報⁹の中から、実に多くの事柄を採択した。本稿ではそのうちの、「偶然」をキーワードとする出来事のみを採りあげたのであるが、この限定的な出来事だけからも、「犠牲者」、「放浪者」、「救われざる者」としてのペリー像が十二分に描き出されていることがわかる。

注目すべきは、これらのペリー像が『冷血』の主題と不可分な関係にあるという点である。殺人者ペリー・スミスを生み出したのは、彼が生れ育った生活環境と彼を取り巻く社会—「彼自身の父か、彼を嘲り鞭打った孤児院の尼僧か、忌まわしい軍隊の軍曹か、彼に“カンザス州から遠ざかっていろ」と命じた仮釈放係官か、そのうちの誰かか、あるいはその全員」（302）—である、というのがカポーティの主張であり、この作品の主題でもある。ペリーは甚だしく愛情を欠く両親の子としてたまたまこの世に生を受け、たまたま預けられた孤児院と救世軍の施設では虐待を受けた。その後も、彼は自分の意思では如何ともしがたい偶然の出来事の連続に翻弄され続けた。まさしく「犠牲者」以外の何

者でもないペリー像が強く印象づけられていると言えよう。そして他のカポータ・ヒーローたちがそうであるように、ペリーもまた、自身の忌まわしい過去から逃れようとして現実味を欠く途方もない夢を追いかけてさまよう。「放浪者」としてのペリーである。だが、他のカポータ・ヒーローたちの場合と同様に、彼の夢も叶わない。叶わないどころか、「犠牲者」ペリー・スミスは、皮肉なことに、殺人者ペリー・スミスを生み出した社会自身によって絞首刑という形で抹殺されてしまう。そこには「救われざる者」としてのペリーがたしかに存在している。ペリーはかつてディックにこう語ったことがある、「一度あることが起こると決まると、おれたちにできるのは、そうならないように祈るだけのことだ。あるいは、そうなるとな—それは事と次第によりけりだよ。」(92) まさに犠牲者としてさまよい続けてきた救われざる者の諦観を感じさせる一言である。

「犠牲者」、「放浪者」、「救われざる者」。カポータ・ヒーローたちに顕著なこれらの共通点こそ、カポータがペリーに見出したイメージであった。そして、このようなペリー像をノンフィクション小説の中で描き出すために、カポータは偶然の出来事を効果的に活用したのであった。

注

1. Nance, William L. *The Worlds of Truman Capote*. New York: Stein and Day, 1973: 211.
2. 菅野昭正編『九鬼周造随筆集』岩波文庫、1991年、78頁。
3. ナンスは「偶然（という要因）がノンフィクション小説を書くうえで重要な役割を果たすが、そのことが、このジャンルの開発が進まない一つの理由である」と述べている。Nance、212頁参照。
4. たとえば、ロングも「この作品全体をとおして、物事が絶えず偶然に生じている」と指摘しているが、その意味については論及していない。Long,

- Robert Emmet. *Truman Capote—Enfant Terrible*. New York: Continuum International Publishing Group Inc., 2008. 88頁参照。
5. Capote. *In Cold Blood*. New York: Random House, 1965:255. 以下、このテキストからの引用は全てこの版により、括弧内に引用頁数のみを記す。
 6. ディックは1959年8月13日にランシングを仮釈放となっている。彼の父、ウォルターは、K.B.I.捜査官のハロルド・ナイの事情聴取のなかで、ディックが刑務所に17ヶ月入っていたと語っているので、逆算すると、彼の収監時期は1958年4月頃となる。Capote, *In Cold Blood*. 166頁参照。
 7. 「現在では、受刑者の平均人数は2,000名ほどである。」テキストには二人がクラター事件で収監された1960年4月当時のカンザス州立刑務所の受刑者数（うち、白人は1,405名）が、こう紹介されており（309頁参照）、二人がランシングで過ごした2年前も凡そこの規模だったと考えることができる。
 8. Plimpton, George. *Truman Capote*. London: Picador, 1998: 203. なお、カポーティのいう「選択」は、集めた情報の中から何を選ぶかだけではなく、どのように語るかという語り方の選択の意味をも含む。
 9. Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985. 112頁参照。

参考文献

- Capote, Truman. *In Cold Blood*. New York: Random House, 1965.
- Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985.
- Long, Robert Emmet. *Truman Capote—Enfant Terrible*. New York: Continuum International Publishing Group Inc., 2008.
- Nance, William L. *The Worlds of Truman Capote*. New York: Stein and Day, 1973.

Plimpton, George. *Truman Capote*. London: Picador, 1998.

菅野昭正編『九鬼周造随筆集』岩波文庫、1991.